

16th International Congress of Oriental Medicine



田中耕一郎

東邦大学医学部東洋医学研究室

16th International Congress of Oriental Medicine (ICOM) が2012年9月14～16日に韓国のソウルで行われた。東洋医学に関する学会には、薬学部の生薬学の系統と、医学部の臨床を中心とした系統の学会があるが、ICOMは、後者にあたる学会である。本学会のメンバーは、日本、韓国、台湾の3国を主体に構成されている。

東洋医学とは

東洋医学とは、日本では「漢方」と呼ばれているものだが、主に東アジアの中国・韓国・台湾・日本を中心とした伝統医学である。国ごとに発展の方向には多様性があるが、医学体系は共通の基盤を有している。そのため、他国の発表を聞いてもその意義は十分吸収できる。

ICOM 参加者

日本からの参加者は実に多様で、東洋医学の専門機関で診療に携わっている方以外に、内科・外科・婦人科などの開業医や勤務医、薬局を開業されながら、臨床・漢方生薬・医学史などの研究をされている先生方が集まってくる。「とにかく、東洋医学が好きでしょうがない」という点が共通している。

東洋医学には、落語や相撲部屋に類似する、“流派”のようなものがある。国内にいと“流派”間には暗黙の壁のようなものが存在していた。しかし、海外の心細い状況では、お互い妙に親近感を感じ、その“流派”を越えて語り合うことができる。そのような場が、近頃ではこの学会をはじめとして多くみられ、“他流試合”がどんどんオープンで行われるようになってきている。

医学部入学が難しいのは各国とも同様だが、韓国・台湾・中国には、東洋医学専門の医科大学がある。特に韓国



会場のソウル COEX.

左から頼先生（東京医科歯科大学客員講師）、筆者、松岡先生（本学客員講師）、三浦先生（本学客員教授）

において東洋医学は非常に権威があるようで、このICOMに現在の韓国の大統領も来賓として出席されていた。

漢字の大切さ

学会で韓国に行って改めて感じたのは、漢字の大切さである。韓国では一般的にはほとんどがハングルの表記で、東洋医学に関係することも、漢方生薬や専門用語以外はハングルである。しかし、通常、東洋医学の古典は、「論語」、「孟子」のように“漢文”であり、漢字で書かれている。漢字は日常生活で使用し、自然と語感をつかんでいるからこそ、使いこなせる。これが大学の専門課程になって初めて本格的に漢字を学んだ場合、古典を読む困難さは想像以上

である。たとえ日常生活で漢字が使えても、“漢文”を読むことは実に難しい。母国語から漢字を失うことで、先人の書いた書物との断絶が生まれてしまう。

あわせて大切だと思うことは、漢字が育てる抽象思考の重要性である。例えば日本語が漢字を失った場合、すべての文章が、平仮名で書かれることになり、音が同じものは文脈から想像するしかなく、漢字のように微妙な表現ができなくなる。そうなると何か深みが足りないように感じるのである。また、漢字よりも同じことを伝えるのに文章は格段に長くなる。

アルファベットなど表音文字が多く使われる中、漢字は象形文字として人類史上最も文字数が多い文字体系 (Wikipedia) であり、漢字一字が多様で深い意味と豊富な情報量を含んでいる。中国は漢字を残しながらも、簡体字といって簡略化した文字を用いるようになった。その中には本来の意味の原型を留めない漢字もある。台湾は昔ながらの繁体字を使っており、日本人も見えてわかる範囲の漢字である。例えば、「学」は「學」となっている。日本では平仮名と漢字を併用して、解りやすく、かつ漢字の良さを損なわないバランス感覚をうまく育ててきたのである。文字が思考を規定する。英語が世界水準とは言え、英語の論理性と漢字の抽象性も活かして学問分野を深めたいものである。

台湾の貴重さ

歴史上の戦乱の中、多くの知識人が中国本土から、台湾へと渡ってきた経緯がある。その中には、古来からの東洋医学の伝統技術を引き継いだ専門医師が多く含まれている。東洋医学は職人芸のような側面があり、細やかな技術の中には人から人へ継承されなければ伝わらないものもある。この点において台湾において東洋医学を学ぶ環境は非常に恵まれているといえる。

学会の印象

学会での印象は、日本からの参加者は、現代医学を主体に修練しているため、発表の内容も現代医学の見識を踏まえてよく考察されていた。一方で、東洋医学的な考察の深みに関しては台湾、韓国の発表に優れたものがあつた。

おわりに

日本では、医学部の卒後研修において、現代医学を基盤とする医学教育がなされている。これを土台に据えながら、伝統により受け継がれてきた東洋医学の中にも価値を見いだし、日本独自の発展的な医療体系を構築できればと、学会で他国と交流しながら思いを強くした。